

学位請求論文審査報告要旨

2011年2月9日

申請者 マリア・コバニ
論文題目 イソップの寓話における翻訳の問題

論文審査委員 糟谷 啓介
 古澤 ゆう子
 坂内 徳明

1. 本論文の内容と構成

本論文の目的は、翻訳研究 (Translation Studies) の枠組みを用いて、古代ギリシアのイソップ (アエソポス) の寓話を取りあげてギリシア語原文と日本語の翻訳とを対照し、その翻訳過程に見られる問題を考察することである。

本論文の構成は次の通りである。

0. 序論

1. 翻訳

- 1.1 翻訳という科学
- 1.2 再翻訳
- 1.3 先行研究
- 1.4 文化的テキストの翻訳についてのアプローチ
- 1.5 方法論

2. イソップ

- 2.1 初めに
- 2.2 イソップの生活
- 2.3 おとぎ話、たとえ話、寓話
- 2.4 イソップの寓話
- 2.5 イソップの言語

3. アリストパネース

- 3.1 アリストパネースの生活
- 3.2 喜劇
- 3.3 アリストパネースの創作
- 3.4 アリストパネースとイソップ

4. 日本語への翻訳

- 4.1 イソップと日本
- 4.2 イソップの『寓話』について
- 4.3 アリストパネースの『蜂』について

5. 分析

5.1 イソップの『寓話』

5.2 アリストパネースの『蜂』

6. 結論

後書き

参考文献

索引

2, 本論文の概要

序論では、文化と翻訳の関係が簡略にまとめられ、本論文の目的が述べられる。それによると、ギリシア語で書かれた作品の翻訳の在り方を通じて、ギリシア人と日本人の考え方や表現法について理解することが、本論文の最終的な目的である。

第一章「翻訳」では、著者が依拠する翻訳研究(Translation Studies)の枠組みが提示される。翻訳とは、原典テキストを翻訳先である目標言語(Target Language)のコードに移し替える作業であるが、そこには「差異のなかの等価性(Equivalence in difference)」が見られることが指摘される。また、先行研究に基づいて、翻訳ストラテジーのタイプ、「明白な翻訳／潜在的な翻訳」(Overt Translation / Covert Translation) 「形式的等価性／テキスト的等価性」(Formal Equivalence / Dynamic Equivalence)などの概念が検討される。そして、Nida、Baker、Delisle、Tatilon らの翻訳理論を取り上げて検討し、本論文で用いる分析枠組みを提示している。

第二章では、寓話の著者として知られるイソップについての概説的な紹介がなされた後、寓話というジャンルの独自性とそこで用いられた言語表現の特質、イソップの寓話で用いられた言語表現の伝承性が論じられる。

第三章では、イソップの寓話を題材にしたアリストパネースの作品が取り上げられる。ギリシア喜劇の成立過程と形式が述べられた後、アリストパネースとイソップの関係が論じられる。アリストパネースの現存する 11 の作品のうち、『騎士』『蜂』『平和』『鳥』『福の神』などの作品でイソップの寓話が語られていることが指摘され、具体例が引用される。

第四章では、論文の対象にしたイソップとアリストパネースの日本語訳についての説明である。イソップの寓話の日本語訳は、室町時代の『伊曾保物語』に始まる長い歴史があるが、本研究は通時的な研究ではないため、現代日本語訳に対象を限定したことが述べられる。アリストパネースに関しても、現在刊行されている日本語訳を用いた。

第五章「分析」が本論文の中心であり、論文全体の半分近くを占める。分析方法は以下のとおりである。まず、Nida の枠組みに従って、原典テキスト(source-text)と目標テキスト(target-text)の間で生じる等価性を「形式的な等価性」と「ダイナミックな等価性」に分類する。前者は原典の形式的構造をできるだけ等価なかたちで移すときに現われる等価性であり、後者はテキスト全体の意味を目標言語のコンテキストに適合させるときに現われる等価性である。さらに、Delisle と Tatilon に従って、テキストのなかの情報を「語用論的情報」(Pragmatic Information) 「状況的情報」(Situational Information) 「文法的情報」(Grammatical Information) 「語彙的情報」(Lexical Information) 「文体的情報」(Stylistic Information) 「意図に関する情報」(Intentional Information)の六つに分けたうえで、それぞれの情報が上の「形式的等価性」と「ダイナミックな等価性」のどちらのストラテジー

で翻訳されているかを確認していくというやり方である。とりあげるのは、イソップの寓話から「鷲と狐」「鷲と黄金虫」「水をうつ漁師」「ヘラクレスとプルトス」という四つの寓話とアリストパネースの『蜂』のなかでイソップについて言及される部分である。それぞれの作品に関して言語的観点からの分析が行われた後には、作品の背景をなす文化的要素の分析が行われる。

結論においては、ギリシア語と日本語の文法構造の違いと文体の違いが述べられたうえで、前章の分析結果がまとめられる。最後に、具体的な翻訳では、これらの違いをどのようなストラテジーを用いて克服するかが問題になることが述べられる。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の第一の成果は、これまでの翻訳研究の理論面における成果を詳細に検討した点にある。そのことが本論文の理論的前提を提示する上で必要なことが当然であるとはいえ、比較的新しい分野である翻訳学全体の動向が的確に把握され、主要な研究におけるキーワードと概念ならびに理論的枠組みについて過不足なく紹介・記述されたこと自体に大きな価値があるものと考えられる。

第二の成果は、こうした翻訳理論の先行研究を十分咀嚼したうえで、その理論的枠組みをギリシア語からの日本語訳テキストに応用して詳細な分析を行なったことである。それにより、原典テキストと翻訳テキストの間の関係を明示的な形で示すことに成功した。テキストが「語用論的」「状況的」「文法的」「語彙的」「文体的」情報ないし「意図に関する情報」という多層的な情報から成っているものとみなしたうえで、それぞれの情報の層でどのような等価性が実現しているかを確認していく分析は実に詳細で緻密である。著者は、対象とした作品のギリシア語原典のひとつひとつの単語や表現が日本語の訳文でどのように翻訳されているかを逐一確認しながら、上記の分析をほどこしている。分析結果は、それぞれの作品に関して「形式的等価性」と「ダイナミックな等価性」の区分と六つの情報のレベルを組み合わせた形で図表に整理され、わかりやすくまとめられている。それに加えて、原文と翻訳の比較という複雑な作業を、二つの異なる「等価性」に分離して見えてくるものを考察するという大胆な試みでもあり、高く評価することができる。

第三の成果は、具体的な対象として、イソップの寓話という特徴ある作品を採り上げたことで、さまざまな種類のテキストの比較対象を行なうことができたことである。本論文は、ギリシア語によるイソップの「寓話」のうち、口頭伝承が後代に文字化された文献、さらに、アリストパネースの喜劇における引用を考察の対象としており、伝承過程に関する資料の確認と注意深い選択がおこなわれている。日本語翻訳に関しては、西洋古典研究者による学術的正確性を重要視した翻訳に加えて、子供の読者を対象とした「わかりやすさ」を重んじる翻訳も取り上げられて比較対照され、それぞれの訳文の特徴が明らかにされている。また、イソップの寓話の翻訳を通して、ギリシア文化と日本文化の比較文化論的考察を行ったところにも、本論文の特徴がある。また、付随的にはあるが、イソップの寓話の英語訳と日本語訳の対照がなされており、それぞれの翻訳に用いられたストラテジーの違いが検討されている。

このように優れた成果をもたらした本論文ではあるが、問題点もいくつか存在する。

第一に、二つの等価性の概念を上記の異なる情報のレベルに適用することから生じる問題点があり、本論文で問題が十分に解決されているとはいえない側面がある。ひとつには、情報のレベルに応じて「形式的等価性」と「ダイナミックな等価性」という対立の関与性の度合いは異なると思われるが、その相違が十分にとらえられているとはいえない。たとえば、翻訳過程において「意図に関する情報」の等価性がどのように保持されるのかについては、「寓話」というジャンルの特性も視野に入れたうえで、もうすこし慎重な手続きがあってもよかったように思われる。また、古典ギリシア語と現代日本語の文法的相違を明確にしつつ図表に反映する作業や「文体的特性」に含まれる異文化要素の説明・紹介内容の処理に関する問題もある。とはいえ、図表の分析においては、両言語の文法構造と両文化に関する相当量の説明と考察が付されて、補遺の努力がなされている。

第二に、言語的分析の緻密さに比べると、比較文化論的な考察が手薄である印象は否めない。ただしそれは、本論文における分析の基盤をあくまで翻訳理論に求めたことから来る限界であるともいえる。原典テキストと翻訳テキストの背景に存在する文化的コンテキストの類似と相違に関しては、より歴史的な考察が必要になるだろう。

しかし、このような問題点が存在するとはいえ、本論文が優れた研究を成し遂げたことに変わりはない。翻訳理論の観点からみた古典ギリシア語から日本語への翻訳過程のケーススタディとして、他の言語テキストへの適用の可能性をうかがわせることも含めて、本論文は大きな学術的価値をもつものである。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終試験結果の要旨

平成 23 年 2 月 9 日

論文審査担当者

糟谷 啓介

古澤 ゆう子

坂内 徳明

平成 23 年 1 月 25 日、学位請求論文提出者 マリア・コバニ 氏の論文「イソップの寓話における翻訳の問題」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、マリア・コバニ 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、マリア・コバニ 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。